



《古式享保頭立雛》江戸時代中期(18世紀)

生涯 人形と 向き合 って



— 吉徳十世山田徳兵衛の コレクション

佐野美術館創立45周年・三島市制70周年 記念

創業300年 吉徳これくしょんの人形
2012.3.3[土]—4.15[日]

二代目 平田郷陽作
《雪の日》
昭和時代中期(20世紀)

東 京における人形の老舗・吉徳の保有する「吉徳これくしょん」は、十世当主の山田徳兵衛(1896～1983)がほぼ一代で蒐集した貴重な人形資料の集大成です。徳兵衛は大正9年(1920)、家業を継ぐにあたって、それまでほとんど体系的に研究されていなかった人形文化の歴史的な研究を独力で始めました。そして、日本の人形の原点といわれる天児や這子といった祈りの人形から、節句に飾る雛人形や五月人形、芸術性に富んだ御所人形や嵯峨人形など、各地の郷土人形、さらに近代以降の人形作家たちによる作品まで、膨大な人形およびそれに関する文献を手元に集めました。

徳兵衛の研究は、単に人形の成り立ちや発展といったことにとどまらず、子どもの健やかな成長を願う親の気持ちや、それらを取り巻く様々な風俗などにも及び、幅広くわが国の人形文化を網羅しています。そこには、人形文化がこれほどまでに発展し伝承されてき

た日本という国への、強い想いがあふれています。そしてこの想いが、昭和の初めに興った人形を芸術の域にまで高めようという、いわゆる

人形芸術運動の牽引力ともなったのです。徳兵衛の尽力によって、その後の人形作家たちは、単なる職人仕事から脱却して、新しい人形の進むべき道筋を見つけることができたのです。

現在の私たちの生活の中でも、雛人形や五月人形は馴染み深いものですが、さらにこの展覧会は、近世以降わが国で多くの人々に愛されてきた様々な人形たちの姿を、ひとりのコレクターの集めた品々によってあらためて見直しい機会となることと思います。

(学芸グループ長 坪井則子)



展覧会ポスターにみる 佐野美術館の軌跡Ⅳ

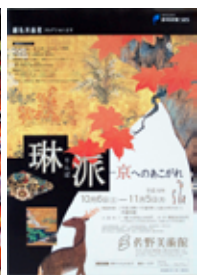
2006年9月～2012年4月

『隆泉17号(佐野美術館開館40周年記念号)』につづく5年間の展覧会を、ポスターでたどります。

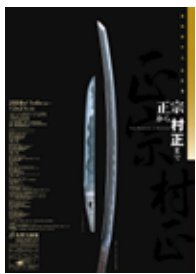
2006▶▶



2007▶▶



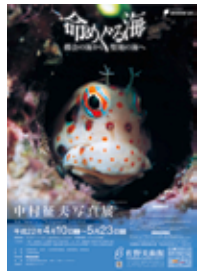
2008▶▶



2009▶▶



2010▶▶



2011▶▶



2012▶▶



野口光彦作《礎》
昭和47年(1972)



大和屋吟光作
《押絵羽子板「助六」(十五代目 市村羽左衛門)》明治39年(1906)